

茶漬

〔おきく物語〕此茂左衛門藤堂家へ出ける子細は、前に與右衛門といひて、淺井家のあしがるにてありし、その小がしらは茂助にて有しかば、ことのほか其みぎり、高虎貧にありし、間には朝のものをもたべざる事ありしに、茂助妻ことのほか不便がりて、茶づけなどたびくふるまひける、夫ゆゑ後までも茂助妻の恩をば、わすれぬとたか虎申され候よし、

〔甲子夜話 二十七〕寢惚先生田太ハ明和ノ頃ヨリ、名高ク世ニモテハヤサレシコト言ニ及バズ中略

今茲癸未ノ四月三日、劇場ニソノ妾ヲ伴ヒユキタル折カラ、尾上菊五郎ト云ル役者、寢惚ガ安否ヲ問來レルニ、略中コレヨリ夜歸リ常ノ如ク快語シテアリシニ、翌四日ハ氣宇常ナラズト云シガ又快ヨクヒラメト云魚ニテ茶漬飯ヲ食シ、即事ヲ口號シ、片紙ニ書ス、

醉生將夢死 七十五居諸 有酒市肺近 盤殮比目魚

是ヨリ越テ六日熟睡シテ起ズ、ソノ午時ニ奄然トシテ樂郊ニ歸セリト聞ク、コノ人一時狂詩歌ノ儼ナリ、

〔倭爾雅 飲食 饋シルカケシ以羹澆飯也〕

〔玉篇 食 饋 子旦切、以羹澆飯也〕

〔段注說文解字 食 下 饋 曰羹澆飯也 此飯用引伸之義、謂以羹澆飯而食之也、考工記注曰、饋讀饗、

耳、內則注曰、狼膾膏臄中膏也、以煎稻米則似今膏、屋矣、釋名曰、肺、饋、从食、贊聲、則幹切、

〔秋苑日涉 八 饋 膏 屋 反〕

說文曰、饋以羹澆飯也、此云汁通雅曰、周禮玉人註、饋讀爲饗、屋、反、且之屋、疏云、醢人有饗食、漢時有膏

屋、按饗即饋字、說文有饋、以羹澆飯也、以作旦之音、則屋當是饋、今人以食物濡湯汁或醬醋曰饋、熙按

釋名曰、肺、饋、以米糝之、如膏饋也、集韻曰、饋古作屋、禮記曰、狼膾膏與稻米爲醢、註曰、似今膏、屋

醢當作餼、屋釋文作屋、饗屋並與饋同、膏屋俗謂之雜炊、

饋